海外ルーツ児童の支援を行う大学生（留学生）ボランティア養成プログラムの現状分析とｅラーニング教材の提案

The Current Status Analysis of College Students Volunteer Training Program and Proposal of E-Learning Material for Overseas Roots Children

金武雅美[*1,2]・松葉龍一[*1,3]・鈴木克明[*1,3]・平岡斉士[*1,3]
Masami KANETAKE, Ryuichi MATSUBA, Katsuaki SUZUKI, Naoshi HIRAOKA
熊本大学大学院　社会文化科学研究科　教授システム学専攻[*1]
立命館アジア太平洋大学　言語教育センター[*2]
熊本大学　教授システム学研究センター[*3]
Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University[*1]
Center for Language Education, Ritsumeikan Asia Pacific University[*2]
Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University[*3]

＜あらまし＞海外ルーツ児童生徒が増加しており，児童らの日本語指導や適応指導についての教員，支援員を対象とする研修は必要不可欠である．特に大学生ボランティア支援員は教育に対する知識も経験も乏しい．短期間で効果的，効率的に児童への支援方法・教育現場での人間関係形成などを身に付けることは重要であるため，今回大学生（留学生）ボランティア養成プログラムを設計した．本稿では，ボランティア養成プログラムの現状分析とｅラーニング教材の提案，今後の計画について述べる．

＜キーワード＞　日本語教育，ｅラーニング教材，教材開発，海外ルーツ児童

1. は じ め に

多様化する海外ルーツ児童の問題の一つに散在地域における学生ボランティア日本語支援員の養成がある．学生ボランティア日本語支援員とは，日本語指導や適応指導の補助・母語学習協力を行うものであり，学生ボランティア日本語支援員は，海外ルーツ児童生徒と意志の疎通が可能な言語を母国語または得意とする留学生が担うことが多い．そこで本研究では，大学生（留学生）を対象とする学生ボランティア日本語支援員養成プログラム及びｅラーニングによる学習システム開発，実践研究を行う．ｅラーニングにすることで，研修指導者と学生が対面研修を実施することは困難な散在地域でも学習が容易になる．また，多くの事例を準備でき，教材作成後も追加が容易であり，動画などを活用することで場面理解が深まるというメリットも期待できる．

本稿では，海外ルーツ児童の支援を行う大学生（留学生）ボランティア養成プログラムの現状分析とｅラーニング教材の提案ボランティア養成プログラムの設計について述べる．

2. 現状分析

滞日外国人や国際結婚により海外ルーツ児童生徒が増加し，公立学校に在籍する日本語指導が必要な児童生徒数は3万人を超え（文部科学省2016），さらに増加傾向にある．その現状において，平成26年度の省令改正により正規の教育課程として「取り出しの日本語授業」が編成・実施できることになった．取り出しの日本語授業とは日本語の習得が不十分なため，他の児童とは別の教室で専門の教師や科目教師，日本語支援者などが日本語や科目の指導を行うものである．しかし，その指導法などの情報共有，指導法の周知徹底は児童の増加に伴っておらず，文部科学省（2016）も散在地域（1校あたり日本語指導が必要な児童が１～5名未満の市区町村）における日本語指導体制の整備を重要課題であるとしている．そのような流れに伴い平成29年度，公益社団法人日本語教育学会が文科省委託事業として「外国人児童生徒などを担う教員の育成・研修モデルプログラム開発事業」を進めている．

3. ボランティア養成プログラムの概要

3.1. モデルプログラム開発事業内容

「外国人児童生徒などを担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の研修モデルでは，外国人児

童生徒等を担う教員・支援員の養成・研修の改善に向け次の２つを目的としている．①外国人児童生徒等教育を担う教員・支援員に求められる資質能力と教育の明示②教員養成課程などの学部養成から現職教員研修までの一貫した体系的なモデルプログラムの開発である．養成・研修モデルプログラムのタイプ（対象）は大きく3つに分けられ「A.基礎教育」「B.専門教育」「C.支援員教育」がある．養成対象によって研修内容の項目は異なるが，大きく21のプログラム内容が想定されており,各プログラムは5～10項目の学ぶべき基本項目で構成されている．多種多様な研修の現場ニーズに対応するため,「モデルプログラム(一定の内容をどのような学習方法・形態で学ぶかを示したもの)」を組合せてカリキュラムをデザインすることを提案している．これは本稿の教材設計のリソースとしても活用する．

3.2.　散在地域における問題点

散在地域におけるボランティア養成プログラムを開発するにあたり,「外国人児童生徒などを担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」及び筆者の支援員としての経験から散在地域の研修実施の問題点と改善案を表１に示す．この結果から散在地域の問題点を改善案するためにｅラーニングが有効であると言える．

表１　散在地域の研修における問題点と改善案

問題点	改善案
教育委員会主導の研修の機会が少ない（実施されても年に1-2回程度）	オンライン研修による研修機会を設ける（必要に応じてブレンド型研修）
研修実施者の不足	eラーニング教材を他地域と共有することで協力体制を作り，互いにリソースを提供することで少人数でも対応可能となる
学生ボランティアの養成・研修プログラムの未実施派遣	時間調整が困難で実施不可能であったが，eラーニング教材を採用することで実施可能となる
支援員の経験や成長に応じた研修実施の必要性	eラーニング教材にすることでカリキュラムやリソースの更新が容易になり実施の可能性が高まる
情報共有の場がない	学習教材としてだけではなく教材・教具の共有が出来るようなコンテンツ作成が可能

4.　ｅラーニング教材の提案

4.1.　教材リソース

「外国人児童生徒などを担う教員の育成・研修モデルプログラム開発事業」の調査で過去の研修においてのベテラン支援員の事例紹介が効果的であったというデータに基づき「A.基礎教育」「C.支援員教育」の基本項目に加え，地域のベテラン支援員及び学生ボランティアへの聞き取りを実施し，散在地域の事例を多く収集し，活用する．

4.2.　事例ベース

現実的な課題に取り組むことで，実際の現場で起こり得る多様な問題に対応できる技能を習得することを目的として，事例ベースでストーリー性のある教材を提案する．初中等教育機関内で起こり得る状況・場面を想定し，学生が主人公となって問題を解決する．解決手段を知るために各項目を学びながら教材を進める．

状況と登場人物の特性（児童の年齢，日本語能力，母語など）との組み合わせにより，同じ状況であっても最善策が異なるような場面を設定する．状況が同じであっても一律の対応ができないことをｅラーニング上で体験し，常に状況に即して最適な対応をするための技能と態度を習得できることが期待できる．

例えば,「ひらがななどを習得している児童が,テスト時，答えをほぼ書かずに提出した」．単純に解答が分からなかったのか，問題の設問が読めずに意図が掴めず解答できなかったのかなど登場人物（児童）の背景を考えた児童への接し方，担当教員との連携の取り方などを習得することが可能であると考える．

5.　今後の計画

前項で設計したオンライン教材を10月にボランティア学生2～3名を対象に実践し，その結果及び被験者アンケートをもとに教材を改善，再度，形成的評価を受ける計画である．本研究において開発されるものが同様の問題を抱える散在地域の教育現場の問題解決の一役を担えればと考える．

参　考　文　献

公益社団法人日本語教育学会（2018）「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業-報告書-」http://www.nkg.or.jp/pdf/2017momopro_hokoku.pdf （参照日2018.07.04）